

目的：外国籍市民が暮らしやすくなる
 指標：外国籍市民と交流している人の割合

目的

国際化の時代にあつて市民一人ひとりが、多種多様な民族的、文化的アイデンティティを尊重し、人に優しい生活システムを構築していくことにより、外国籍市民が暮らしやすくなるまちづくりの実現が必要であると考えます。

指標

外国籍市民と交流する人達がより増えることにより、日常生活の中で様々な不安やトラブルが減少するようになることを目指します。

設問

この指標は、次の設問により直接的に聞いている。「個人・行動」

あなたは日頃、松戸市に在住したり、滞在したりしている外国の方達と親しく接することがどのくらいありますか。(1つに)

- 1 大変よくある 2 しばしばある 3 ときどきある 4 あまりない
 5 ほとんどない

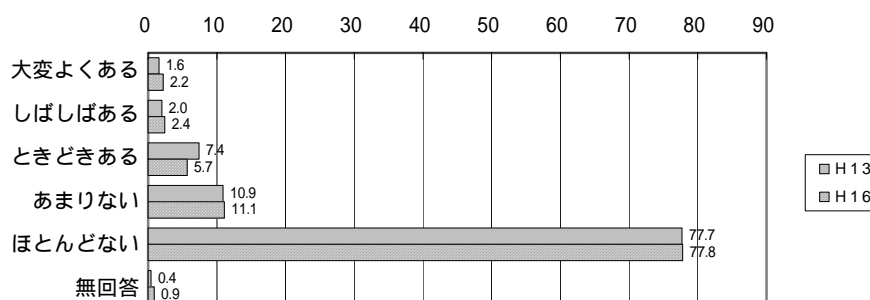
指標の現状(値)

カテゴリー	H13年度	H16年度	H19年度(目標値)
大変よくある	1.6%	2.2%	
しばしばある	2.0%	2.4%	
計	3.6%	4.5%	7.0%

指標の分析

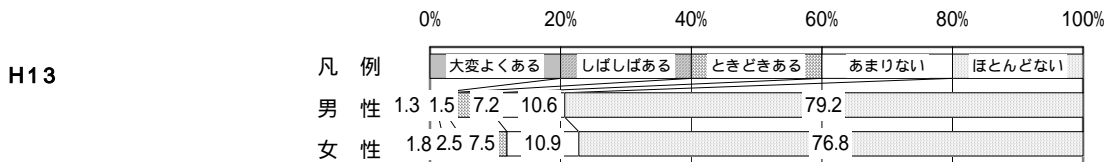
わずかずつではあるが広がりつつある、外国籍市民との交流

外国籍市民との交流が一定程度ある人は、わずかに増加傾向にあり、平成19年度目標に向けて若干近づいた状況にある。内訳では、「大変よくある」「しばしばある」ともにわずかではあるが増加しており、外国籍市民との交流が、徐々にではあるが進みつつある様子がうかがえる。

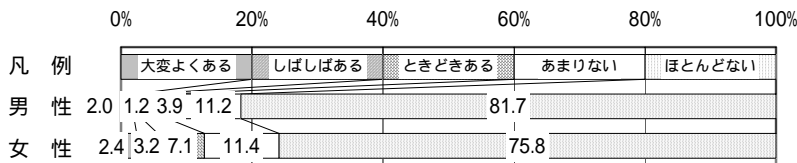


次に、性別で見ると、大きな差は見られないものの、女性の方がやや交流する人が多くなっている。

【外国籍市民との交流×性別】

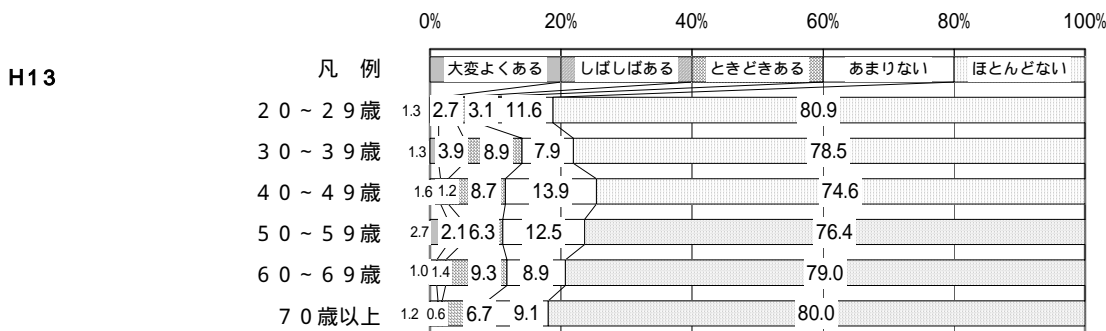


H16

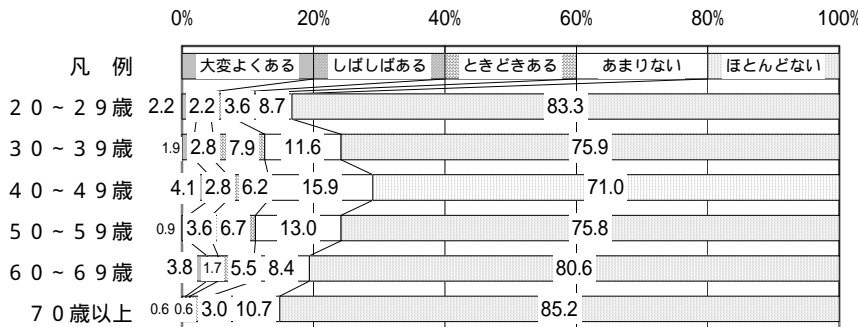


また、年齢別に見ると、総じて交流している人の割合は少ないものの、40歳代を中心とした世代で比較的交流する人の割合が高まっている。

【外国籍市民との交流×年齢】



H16



目的：すべての人が世界平和を望むようになる
 指標：国際紛争に対する関心を示す人の割合

目的

世界の人々、これから生まれてくる子どもたちに再び戦争等の悲惨さを繰り返さないために、世界唯一の被爆国として、平和の重みを感じ、平和を愛し、平和の大切さを深めて、何よりも尊い恒久平和に対する意識を高めることが重要と考えます。

指標

国内においては、平和な状態が維持されているが、国家間の紛争や軍備の拡張、テロの台頭による緊張の高まりは、当事国だけの問題でなく様々な形で他国の平和を脅かしているため、世界にも目を向けた市民の平和に対する意識の高揚を図ることを目指します。

設問

この指標は、次の設問により単なる興味関心ではなく、解決という意識を聞いている。「社会・態度（関心）」

あなたは、現在世界のあちこちで起こっている国際紛争の解決について特に関心をお持ちですか。（1つに ）

- 1 大変関心を持っている 2 かなり関心を持っている
 3 ある程度関心を持っている 4 あまり関心を持っていない 5 ほとんど関心がない

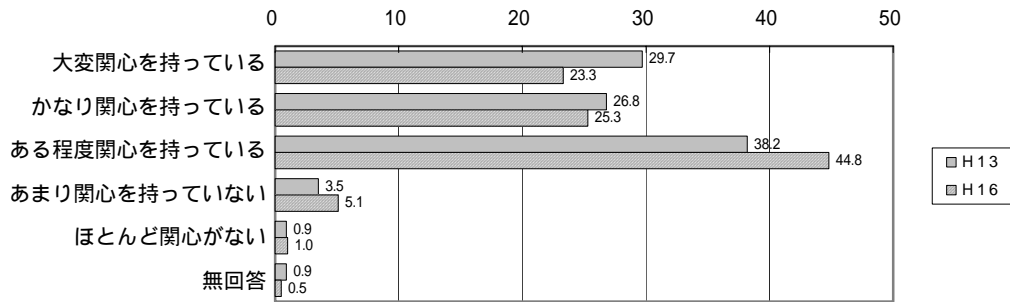
指標の現状（値）

カテゴリー	H13年度	H16年度	H19年度(目標値)
大変関心を持っている	29.7%	23.3%	
かなり関心を持っている	26.8%	25.3%	
計	56.5%	48.6%	56.5%

指標の分析

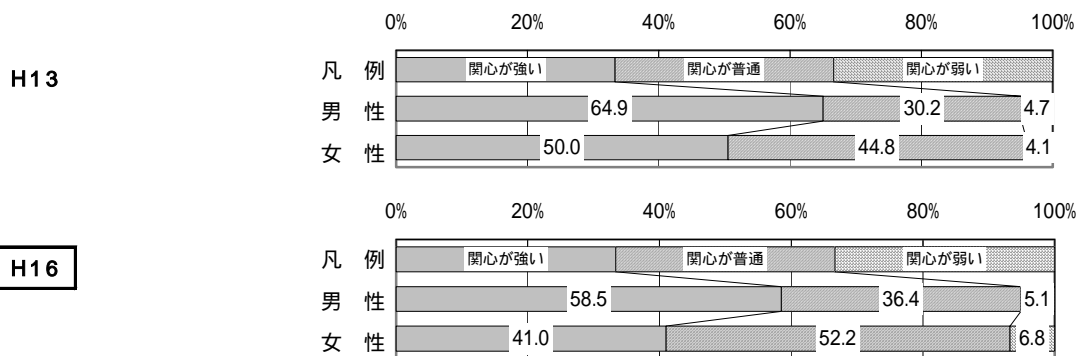
国際紛争の解決に対する関心は減少、実施時期の時事問題が影響していることも考えられる

国際紛争の解決について、強い関心を持つ人の割合は、前回に比べ減少している。平成13年度実績と同水準として掲げた平成19年度目標からは、かい離する結果となったが、前回実施時点（平成13年10～12月）が、アメリカ同時多発テロ（9月）発生直後であり、国際紛争に対する関心を高めたことが影響していると考えられる。またその後、世界各地における紛争が日常的に伝えられるようになったことで、関心の程度も落ち着いてきたことが、「ある程度関心を持っている」との回答が増加していることから背景として考えられる。



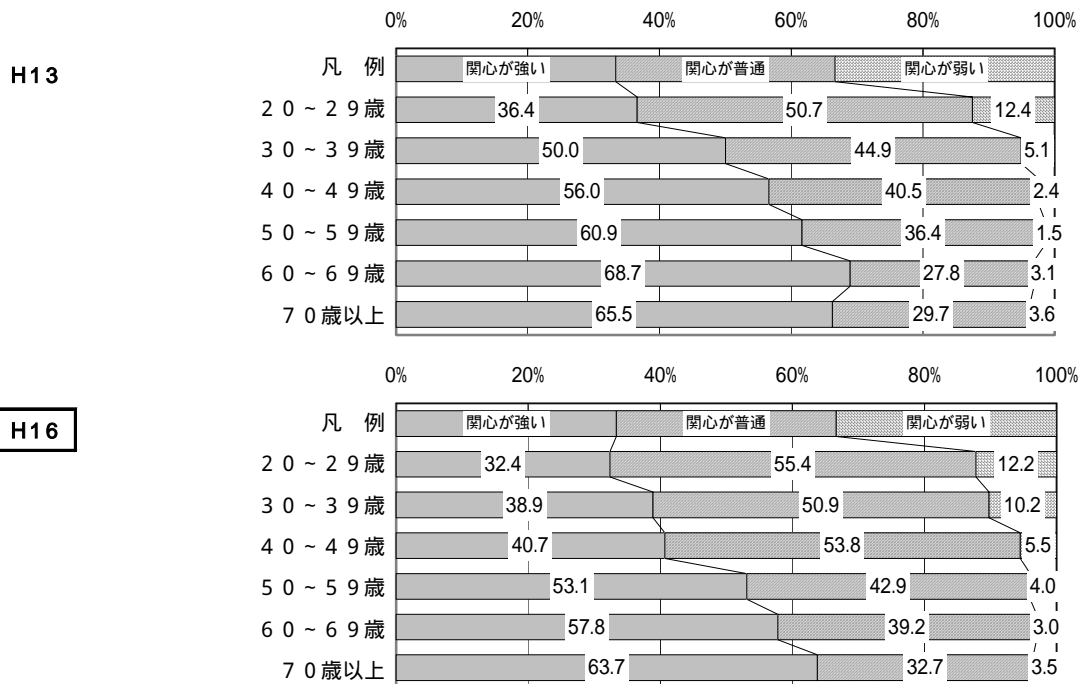
次に、性別で見ると、女性に比べ男性の方がより高い関心を持つ傾向にある。

【国際紛争×性別】



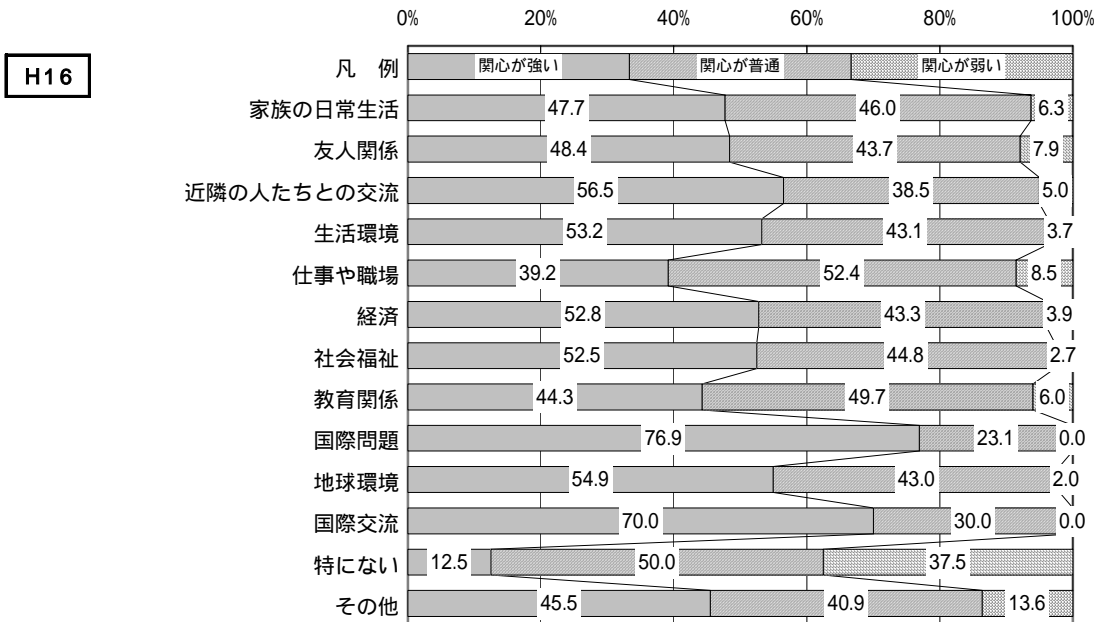
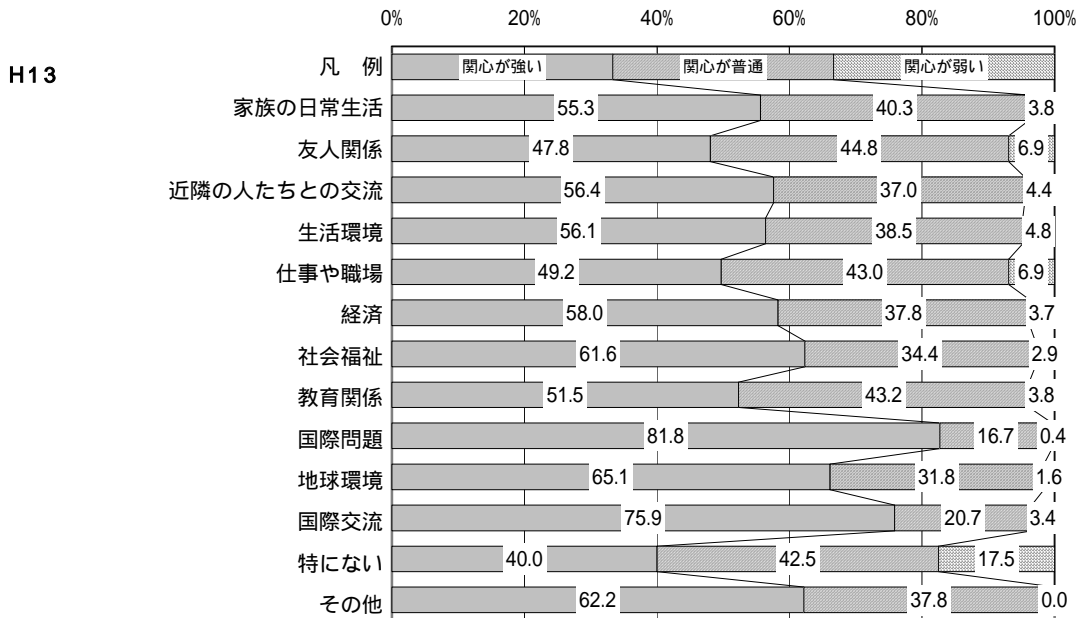
また、年齢別に見ると、年齢層が上がるにつれ、関心が高まる傾向が、前回と同様見られる。

【国際紛争×年齢】



さらに、日常的な興味や関心との関係を見ると、「国際問題」「国際交流」などに興味や関心を持つ人が国際紛争の解決にも高い関心を持っていることがわかる。

【国際紛争×興味や関心】



16) 第3節 次代を育む文化・教育環境の創造 第6項 多様な文化・芸術の創造

目的：より多くの人々が文化・芸術に親しみ、自ら創造的な活動をするようになる
 指標：文化・芸術に親しむ人の割合

目的

市民が自分の住むまちに愛着を感じ、郷土として誇りを持ち続けるには、文化的なアイデンティティが大きな要素となります。市民自らが文化の担い手となり、独自の文化を創出していくことが求められており、わがまち「まつど」の文化芸術活動を促進し、市民はもとより市外の人にとっても魅力のあるまち「まつど」をつくり上げることが重要と考えます。

指標

市民が親しんだり活動したりしている文化や芸術には様々なものがありますが、市民の自主的活動や自ら創造的な活動をする市民が増えていくことを目指します。そこで文化・芸術に親しむ市民の割合を指標として測ります。

設問

この指標は、次の設問により創作や実践と鑑賞を区分して直接的に聞いている。「個人・行動」

あなたは日頃、絵画、音楽、映像、演劇などの芸術文化を鑑賞したり、創作や実践することがありますか。(1つに)

- 1 鑑賞し、自分でも創作や実践もしている
- 2 よく鑑賞するが、自分では創作や実践はしない
- 3 時々鑑賞している
- 4 たまに鑑賞している
- 5 ほとんど鑑賞しない

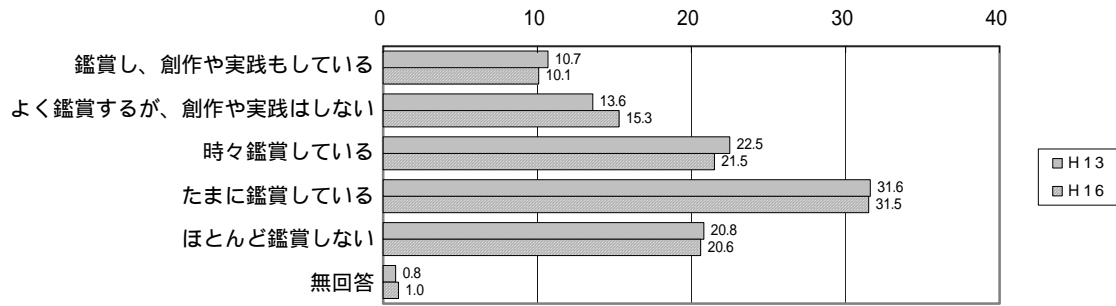
指標の現状(値)

カテゴリー	H13年度	H16年度	H19年度(目標値)
鑑賞し、自分でも創作や実践もしている	10.7%	10.1%	
よく鑑賞するが、自分では創作や実践はしない	13.6%	15.3%	
時々鑑賞している	22.5%	21.5%	
計	46.8%	46.9%	50.0%

指標の分析

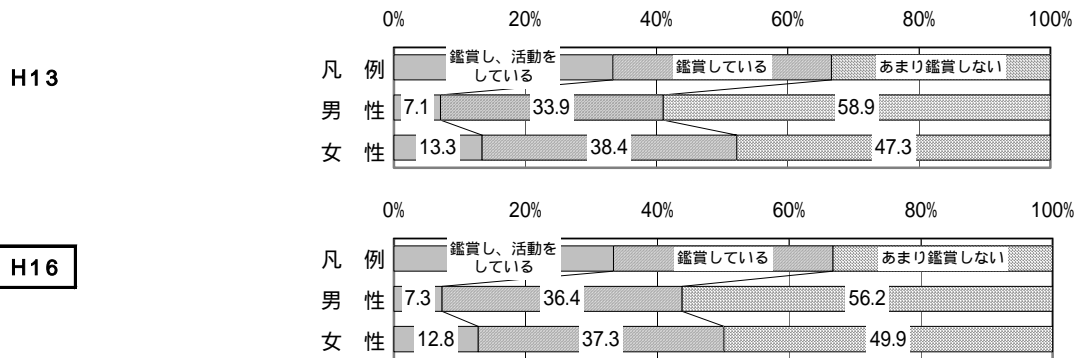
文化・教育環境の満足度が、定住意向と関連している

芸術文化緩衝、創作・実践などを行っている人の割合は、前回とほぼ同様、横ばいの傾向で推移している。内訳として見ると、鑑賞、創作・実践ともに行う人はわずかに減少、よく鑑賞し、創作・実践しない人はやや増加、ときどき鑑賞する人はやや減少と、鑑賞中心の行動パターンが増える結果となっている。



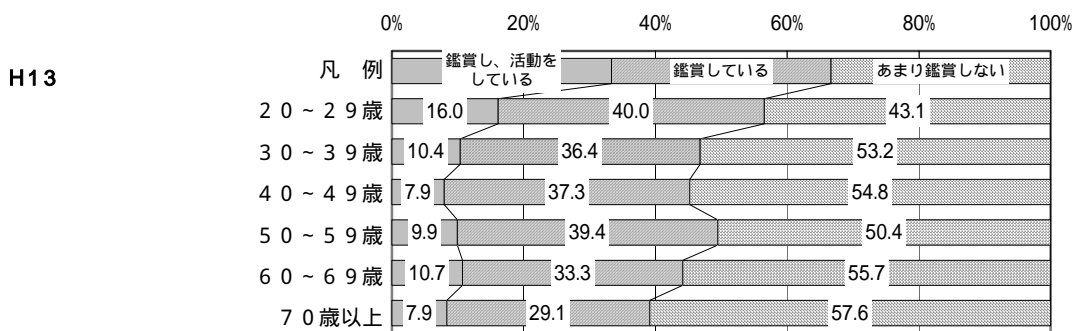
次に、性別で見ると、女性の方が男性に比べやや積極的に活動している結果となっている。特に、鑑賞・実践ともに行っている人の割合が男性に比べ高いのが特徴的である。

【文化・芸術活動×性別】



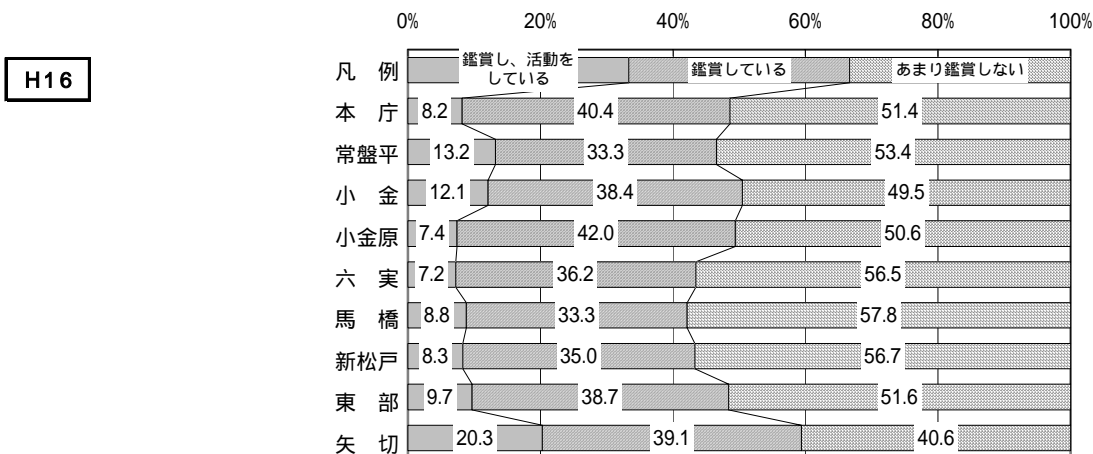
また、年齢別に見ると、鑑賞・実践の両方を行っている人は、20歳代の若年世代を中心に比較的高い割合で、年齢層が上がるにつれ徐々に低下し、60歳以降で高まるという傾向が見られる。趣味・嗜好などで時間を活用する若年層と、比較的自由な時間が増える高齢者層において積極的な行動が見られやすいという状況となっている。

【文化・芸術活動×年齢】



地区別で見ると、いずれの地区においても「あまり鑑賞しない」が多くなっている。「鑑賞し、活動をしている」が比較的多い地区としては、矢切、常盤平、小金地区などがあり、「鑑賞している」が多いのは小金原、本庁、矢切地区、「あまり鑑賞しない」が多い地区としては馬橋、六実、新松戸地区などとなっている。

【文化・芸術活動×地区】



さらに、文化・芸術環境の満足度との関係を見ると、満足度が高い人が積極的に鑑賞・活動する傾向があるのはもちろんのこと、不満を持つ人も比較的、積極的に鑑賞・活動する傾向が見られ、その中間、普通であるとした人が、鑑賞・活動ともあまり積極的でない傾向が読み取れる。積極的に鑑賞・活動する人ほど、文化・芸術環境に関心が高まるという結果とも見ることができる。

【文化・芸術活動×満足度（文化・芸術環境）】

